

グローバル化と身体の方

タイトル(その他言語)	La globalization y el provenir de nuestro cuerpo
著者	西谷 修
雑誌名	研究年報 : グローバリゼーションと伝統スポーツ : 神戸市外国語大学・バスク大学第2回国際セミナー
巻	50
ページ	99-106
発行年	2013-07-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1085/00001619/

グローバル化と身体の行方

西谷 修

四日間にわたる内容豊富なセミナーで、今朝はヴィジュアルな資料の提示もあり、そして最後に柏木さんのお話があつて、だんだんとくつろいだ雰囲気になつてきたかと思ひます。この先は、打ち上げの懇親会も待つていて、みなさん、もうすぐバラダイスと楽しみにしておられることかと思ひます。その天国の味わいをいつそうすばらしいものにするために、これから少しの間、みなさんに地獄の退屈さを味わっていただこうと思ひます(爆笑)。

わたしの話はイメージの膨らむヴィジュアルな話でも、芸術的な創作の快楽もなく、ただただ思弁的な話ですので、せめて、それがみなさんを午後の安らかな眠り(スペイン名物のシエスタ!)に誘う、しばしの安らぎの時間になればと願ひています(笑)。

とはいつても、ここで眠ろうとしてもなかなか難しい。講師に失礼だから眠つてはいけない、とみなさん我慢して一生懸命起きていようとする。でも、逆らいきれぬものではありません。ただ、いけない、いけないと思ひつつ、ついにガクツと崩れるこの瞬間、じつはこれが人生一番の快楽であります(爆笑)。その悦楽の世界にみなさんをお誘ひしたいと思ひます。では、本題に入らせていただきます。タイトルは「グローバル化と身体の方」しておきました。ですから、身体についても触れたいと思ひますが、ここではできるだけ話を近代スポーツ(近代競技スポーツ)と伝統スポーツ(民族スポーツ)ということに引きつけさせていただきます。

長いスパンのグローバル化

まず、「グローバル化」ということですが、これは人間の活動の広がりや地球規模になるとか、世界がひとつの共通の「場」になること、というようにとりあえず理解していただいと思ひます。しかし、共通の「場」ができるためには、そこで活動する人びとの行為が共通の尺度をもたなくてはならない。ですから、あらゆる活動の仕方が規格化される、あるいは画一化されるということになります。つまりは、活動のルールが共

通化される、ルールが一元化されるということです。その反面、規格に当てはまらない要素はすべて切り捨てられるということになります。

だから、グローバル化した世界でもっとも意味をもつものは、部分化され規格化される、あるいはどこにでも共通に通用する、言い換えれば持ち運びができるようなものになります。その典型的なものがテクノサイエンス、つまり科学技術であり、もうひとつは経済の領域に落とし込まれたものです。科学技術にしろ、経済にしろ、さまざまな雑多な要素を排除して、単位化され、計量化できる部分を取り出して、ものごとを要素に還元し、それを数字を介して交換し流通させてゆくということになります。これならどこでも通用させられます。

昔だったら手でつかんで確かめる、手触りのあるものが相手であつた物理学の世界でも、やがて見えなくても数値で測れるものが対象となり、その対象はやがてすべて情報に還元されるようになります。情報に還元されるということは、最終的には十・一(プラス・マイナス)の組み合わせ、つまりは一〇一〇一〇のコンピューターの原理に落とし込まれてゆくわけです。一番単純な信号の操作に還元されるということです。そしてそれを原理にしたコンピューターが万能の判断装置になります。結局それで、世界のさまざまな現象がそのような数値の操作に還元されると同時に、われわれはそういうシステムを介して世界を受け止め、世界に働きかけるということになります。これがグローバル化した世界のものの扱いの基本的な原理になっています。

もちろん、グローバル化は一朝一夕でなつたものではなく、大きな歴史的な運動によつてできたものです。このセミナーでもいろいろな話題ができました。たとえば昨日(八日)の松浪さんの発表などでも日本のむかしの話がでてきました。日本の場合は、この一五〇年ほどの間にたいへん大きな社会的変化を経験していて、そのことを私たちは体験的に知つています。その変化は実は大きく言えばグローバル化によつてもたらされたもので、世界中どこに行つても同じような生活の仕組みや光景に出合うという現在のような状況を理解しようとするときに、やはり、どういうプロセスを経てこんな風になつたのかということを考えざるをえません。

このグローバル化の動きというものは、西洋世界、オクシデンツの世界から広がつてきたものです。日本は明治の頃、このグローバル化の動きに

呑み込まれるというか、その動きに自ら同化していくという選択をして、西洋的な世界への統合のプロセスを経験してきています。それを念頭に置くと、グローバル化という事態を、ただ冷戦後のここ二〇年ばかりの変化として考えるのではなく、さらに遡って、現在のような世界がどのようにしてできたのかということをもっと長いスパンで考えざるをえません。ひとことで言ってしまうと、西洋においてモダニティ（近代性）が形成され、その一方でモダニティが共通の方向として世界に拡大されていく、そのプロセスとしてグローバル化というものを理解することになります。

ついでに言いますと、ヨーロッパ（オクシデント＝西洋）のモダニティの発端は大航海時代とルネッサンスにあります。その画期となったのは言うまでもなくコロンブスの航海ですが、そのコロンブスの四隻の船団にバスクの船乗りが相当数乗っていたということをわれわれは知っています。そのスペイン人・ポルトガル人が地球を回って、反対側の日本にも来ました。そして、ヨーロッパオクシデントの世界が最初にこの島国・日本に伝わったことも、ある著名なバスク人の名前と切り離せません。ひとりのバスク人フランシスコ・ザビエルが、日本に初めてキリスト教を伝えました。そしてまた、今回の会場のここ神戸という街は、日本の近代化に重要な役割を果たした港町です。その意味で、この町で、バスクの人たちとわれわれ日本の研究者がグローバル化について考えてみるということはいへん意義深いことだと思えます。

グローバル化の三段階

そこで、日本とグローバル化の関わりについて考えてみたいと思います。日本の場合は、グローバル化、つまりはヨーロッパの世界展開に、二段階で関わることになります。最初はザビエルの時代です。一六世紀後半のこと、そして二度目は一九世紀の後半です。一度目は鉄砲とキリスト教がもたらされ、日本はこのキリスト教の浸透を食い止めるために国を閉ざします。それによって、西洋からはじまるグローバル化の動きにブレーキをかけたとも言えます。けれども、一九世紀半ばの時には、もはやこの動きを食い止めることはできず、日本はみずからメイド・イン・西洋の国際システムに自分たちもメンバーの一員として参加することを選び、グローバル化の動的な秩序に加わっていきます。それは主権国家体制への適応であり、

自らを国民国家として形成してゆくということでもありました。

では、西洋発のグローバル化がどのような段階を経て展開されてきたのかを考えてみると、おおざっぱに三つの段階に分けることができます。

最初のグローバル化、つまり、グローバル化の最初のステップは神学的（セオロジカル）なものであったということができると思います。それは世界の、つまりヨーロッパ以外の地域の理念的なキリスト教化です。たとえば、マゼランは世界周航の途中で、いまのフィリピンで殺されてしまいますが、その仇を討つために、翌々年にスペインから軍団が送られて、あの島々は全部占領されて、フィリッピン王に捧げられます。そのために、あの島々は今でも「フィリピン」と呼ばれています。つまり、フィリッピンというのですが、あそこの人たちはそれ以来キリスト教の洗礼名をもっています。わたしたちは、たとえば、わたしは修という名前だし、竹谷さんは和之という名前をもっています。これは日本の伝統的な名前です。でも、フィリピンではほとんどの人は洗礼名、クリスチャン・ネームになってしまいました。これは世界のキリスト教化の典型的な例ですね。いまのアフリカでも多くの人が洗礼名、クリスチャン・ネームをもっているのは、こういうキリスト教化の結果です。このように、西洋人による世界の征服は、まずキリスト教の権威（ローマ教会）によって正統化されたのです。それがコロンブスの時代から一七世紀ぐらいまでかけて行われます。

次いで、ヨーロッパでは一七世紀の半ばから主権国家の体制ができます。それは、主権国家を単位とした国家間の秩序です。そこでは、主権をもつ国家だけが国際関係のなかでの正統なプレイヤーであるということになります。いわゆるウェストファリア体制というものです。そして、この主権国家間システムというものが世界に広められます。これはヨーロッパ産です。たとえば、一九世紀の日本では、周辺を見てみると、清があり、朝鮮があり、沖縄があります。沖縄は主権国家ではありませんが、日本もそうではありませんでした。東アジアには違う統治形態とそれぞれの相互関係があったのです。その頃、薩摩藩に服属していた沖縄は、清とも朝貢関係を保っていました。けれども、一九世紀にこのヨーロッパの国家間システムが実質的に世界の規格になって広められ、主権国家ではないところはすべて植民地にされてしまいます。そのとき、沖縄は主権国家になろうと

した日本に統合されました。それ以後、地球の表面はすべて国境によって分断されるようになります。これがグローバルゼーションの第二段階です。つまり、国民国家のシステムが世界に広められたということです。ですから、グローバル化の最初が神学的支配として始まったとすれば、この第二段階は政治的（ポリティカル）な段階です。そして、それから一世紀ほどして、そのポリティカルな境界も相対化されるようになる、そういう時代がきます。そのときには、世界は国境を越えて、グローバルな市場（マーケット）に一元化され、世界をひとつの共通市場にするような状況が生まれます。そして、世界を一元化した経済成長が目指される、そういう時代になります。これが三番目の段階で、それを経済的（エコノミカル）段階と見なすことができます。

日本は、この第一段階ではグローバル化にブレイキをかけたことが、第二段階ではみずから国際社会のプレイヤーとして、この秩序の中に参加してゆきます。そして新しいメンバーになった。しかしその挙句が、世界戦争になってしまったということです。

ここでバスクに関したいへん興味深いのは、じつはこの第二段階で、バスクの人たちは国家形成をしなかったということです。それで、国家とは違うステイタスを求めるようになった。日本の場合はヨーロッパとはまったく違う歴史があつて、そこに西洋的な原理を接ぎ木してグローバル化の中に入っていくます。ところがバスクは、大きく言えばヨーロッパの一部ではあるけれども、国家秩序を原理とする近代ヨーロッパそのものとは違う道を歩むことになりました。だから、いまのグローバル世界のシステムを、もともと自分のものではないと感じているわれわれとしては、ヨーロッパではありながらヨーロッパの王道とは違うという道を歩んできたバスクのあり方にたいへん興味をもちます。

近代スポーツの形成、産業社会とメディア

まずはグローバル化をそんなふう理解しておいて、では、その運動や秩序のもとでスポーツとは何なのかということを考えてみたいと思います。いわゆる近代スポーツの誕生、近代スポーツというものが形成されるのは、産業社会の成立と軌を一にしています。そして、この産業社会の成立は、これまた国民国家の成立と並行して起こります。それは、さきほどのグロー

バル化の段階でいいますと、二番目の段階に対応します。

工業生産がおこなわれるようになり、社会が産業化するとどうなるかといえますと、個人が解放されます。つまり、人びとは古い共同体（農村）を離れて（あるいは追い出されて）、自由な個人になります。自由な個人なものにも縛られずに（なんのよるもなく）、体以外になにもものも所ないない労働者として都市に流れていきます。つまり、「自由な個人」というのは、まずは一人ひとりが孤立して、分断された、拠り所がなく流れ漂う、そういう人間です。そういう人たちが、みずから労働力として売るわけです。かれらが「所有」しているのはそれだけです。そうして、みずから労働力という商品となつて、産業社会を成り立たせる商品の流通回路に入っていきます。その商品交換の場として「市場」というものが想定されます。

西洋の近代がモデルとして構想する「自由で自律的な個人」というのは、孤独で、だからつねに飢えを恐れ、利己的な欲望にしたがって利益を追求する人間、ということになっていきます。これが近代経済学、市場を舞台として動くみなされる経済システムがモデルとして想定する人間、「ホモ・エコノミクス」です。そのような個人は、基本的にはバラバラで、お互いになんかの繋がりもありません。そのバラバラになった個人を、別の次元で統合するのが「国民」という意識です。言い換えれば、それまでの土着の共同体、あるいは地域的・家族的な絆といったものが解体されて、一人ひとりの人間がバラバラになつてしまうと、バラバラなままではまずいその人間たちを、国家が「国民」という新たな共同体に組み換えてゆきます。いわゆる土着の自然的に形成されていた共同体が解体され、バラバラになつて市場に投げ出される個人を、「国民」という概念が新しい政治的共同体へと再編してゆくというわけです。

そこでメディアが大きな役割を果たします。いわゆるマスメディアと呼ばれるものです。ヨーロッパの人たちにとつては自明のことですが、メディアというのは媒介とか媒体という意味です。ですから、バラバラになった個人を結び付ける媒介。媒体がメディアなのです。たとえば、電車で、あるいはカフェで、隣にいるのがまったく見えず知らずの人で、わたしも自由な（しがらみのない）個人、あなたも自由な個人、という何の関係もない孤独なこの二人を結び付けるのは、昨日のテレビで観たオリンピックの競

技だったり、週刊誌の広告の有名人のゴシップであつたりするわけです。まったく知らない同士でも、二人が居合わせて、昨日のサッカーの試合、見た？と声をかければ話が通じてしまします。メディアというのは、まさにそういうバラバラの見知らぬ人たちを繋げる役割を果たすのです。もちろん、昔はテレビではなくて新聞や雑誌だったでしょう。そうした知らない同士でも、「なでしこジャパンが勝つよね」というような話をすれば繋がっていくことができます。

もう一つ、人びとを結びつけるものがあります。言うまでもなくそれは戦争です。戦争は人を兵員として国家に動員して統合するだけでなく、人を否応なく「敵と味方」に分けて対立関係におき、「われわれ」を結びつけます。メディアはそのときに大きな力を発揮しますが、それだけでなくメディアは、共通の言語とか、共通の知識とか考え方（偏見）とか、共通の喜びというものをもつて、見知らぬ人たちを「国民」に統合してゆきます。

メディア、とくにマスメディアですが、マスメディアというのは基本的にドメスティックです。内向きです。なぜかといいますと、新聞にしろ、テレビにしろ、政治や経済や、オリンピックのようなものを、日本のメディアならすべて日本語で語ることになるからです。そこでは、日本人の視聴者が前提になっています。スペインの読者や視聴者は想定されていません。そのうえ、視聴率とか販売部数とかを考えなくてはいけないために、当然ながら日本人の客をとれるような記事や番組にします。だから、報道されるのは、日本人向けのニュースとか、日本人向けの情報ということになつて、避けがたく「内向き」になります。もともと「国民」というものは、眼に見えるものでも、手でつかめるものでもありません。それは一つの觀念です。その觀念は表現されないと、あるいは依代となる象徴のようなものを与えられないと、リアリティをもちません。だから、国とか、国民を表現するためにいろいろとシンボルが作られるのです。そのなかでたいへん大きな役割をはたすのが、つまり、国民という觀念を眼に見えるかたちで多くの人びとに訴えかけるものが、公共的な、パブリックなスペクタクルです。とりわけ、生身の身体によるスペクタクルというのは大きな働きをします。

身体と国民共同体

日本語の「身体」という語は翻訳語ですが、もともとの言葉はラテン語のコルプス（corps）です。そのコルプスというのは、ただの「身体」を指すだけではなく、たとえば、教会はキリストの身体であるというような言い方をします。ですから、キリスト教徒の集団である共同体、つまり、キリスト教の信仰共同体はそれ自体がコルプスです。

近代の初めに、国家のことをどう考えるかということが問題になりました。国家も目には見えません。だから、それは国王が体現するというところで、国家をイメージするとき、王のコルプスということが語られました。その文脈で言うと、まさに、コルプスを通しての、公共的な身体をおし、演出するときにとっても役に立ったわけです。

何の話をしているかというと、もちろん近代競技スポーツのことを言っているわけです。このことを集約的に表現しているのが、いわゆる近代オリンピック競技というものです。さきほど、スポーツというのは産業社会と不可分だと言いました。産業社会では人は自分を労働力として売ります。それも自由意志にしたがつて売ることになっています。それで、買われた時間のあいだは労働力として拘束される。けれども、それ以外の時間は自由だというわけで、この余暇の活動として、スポーツ（気晴らし）が生まれる余地があるわけです。ですから、近代の産業社会で人間が不自由な労働力になる一方で、自由な余暇の時間が生まれる。そこに、いわゆるスポーツの居場所、スポーツ活動の場が広がるわけです。そのようにして、スポーツの活動というものは、もともとは個人的なものであるわけですが、それを公共的スペクタクルとして演出することで、一つの「国民」というものの表現になっていきます。基本的には個人的で自由な活動のはずなのですが、それが公共的なスペクタクルとして組織されていくことによって国家化されていく、ナショナルなものになってゆくということです。

オリンピックでは、国ごとに代表が出場して、もちろん選手個人が表彰されるわけですが、全体として、まさに世界はこういう国々でできている、という表現になっています。そういうスペクタクルですから、それぞれの国が、外に対しては「国力」を示威し、内に対しては「われわれはみんな同じ国民」という、そういう団結を生み出すわけです。だから、この行事

はそれぞれの国にとって国家的な事業となっていくます。そのために、どの国でも選手の国家的育成をやるわけです。だから、近代オリンピックの100年余の歴史は、さきほど言いましたグローバル化の第二段階を色濃く反映していることになりました。そして、それを世界に見えるものとして提示しているわけです。

それがここ20年くらいは変質していつて、むしろ第三のステージを表現するようになってきています。いま、誰がオリンピックをやりたいのか、どこの国がオリンピックを組織するのか、それを考えてみると、かつては欧米諸国、そして発展途上国がほとんどもこんな立派な国になったんだということを示したいがために開催します。それが東京オリンピックであり、ソウル・オリンピック、そして最後は北京オリンピックですね。奇しくも（あるいは当然ながら）、それはすべてアジアの国々です。やつと世界のグローバル化の仲間に入れてもらえたというわけです。では、先進国の場合、世界の欧米の国々がいまだとしてオリンピックをやりたいかといいますが、それはひたすら「経済効果」をねらっているわけです。観光業というものがありますが、それと同じように、というより世界遺産と同じように、新しい技術革新とか、産業的な新展開とか、そんな元手なしに、消費のために提供しうる景気づけの手段としてオリンピックを選ぶわけです。つまり、これは純粋な消費産業です。それが現在では、オリンピックに代表されるような近代スポーツ・スペクタクルの推進条件になっています。

では、そこでどういう競技が行われるかということを考えてみますと、単純な、それこそ「より速く、より強く、より高く」といったような競技種目だと、記録の更新が「進歩」だとか優秀さを表現することになります。その「進歩」を生み出すのは、だいたいは技術的な条件です。より複雑なゲーム競技のようなものでは、その競技の由来とか意味といったものはまったく削ぎ落とされて、形式化されたルールの組み合わせに還元されて、数値評価されるようになっていきます。ここ数日、ロンドン・オリンピックを機会にいろいろと話題になっている柔道などの勝負ゲームについてもそうです。形式ルールによって元々の意味が削ぎ落とされてしまうと、競技の性質はまったく違うものになってしまう、そういう現象がそこで起こるわけです。グローバル化する、どこでも同じように普及され、どこでも同じ

ように評価されるようになる、というのはそういうことです。

記録を求めるとか、あるいは点数でパフォーマンスを競うとか、その方向に競技スポーツは向かっています。これをいまのまま技術的に伸ばしていくとどうなるか。するとやがて、スポーツというものの自体が成り立たなくなってしまうかも知れません。つまり、ドーピングの可否とか、あるいは、サイボーグ化とか、いわゆる「性能」追及が「人間」を消し去ってしまう、そんな事態が視野に入ってきてしまっています。人間を機械と考えて、その性能を高める成果が、記録やメダルに反映されるということですね。その方向は、スポーツ自体が推し進めているのではなくて、現代世界の科学技術的な条件、もつと言え、現代世界の身体を見る、身体を扱う科学技術的な条件が、否応なくそのような方向に引っ張っていくわけです。そこでは、かつて自然や社会を対象としていた「開発」という考えが、いまや人間の身体を領域として展開されているということです。それは、テクノサイエンス（科学技術）だけのせいではなく、それを動かし方向づける「経済的要請」が圧力として加わっていて、技術も重要な投資の対象になっています。そういう状況を示す資料をひとつだけ挙げておきますと、すでに90年代に『ヒューマン・ボディ・ショップ』という本が書かれています。そこでは、完全に人間の身体が産業的開発の対象となっていて、それがスポーツにおける身体の開発にも適用されていくわけです。

スポーツの与える感動

そろそろ話を結論の方向に向けていきたいと思っています。

スポーツにおける身体をとりまく現在の条件といったことに踏み込んでいきますと、ほんとうに広大な問題がでてきます。今回は触れる程度にとどめておきたいと思いますが、いまお話ししたように一方では、政治的なナショナリズムをビルトインされたスペクタクルになってしまいうということ、それからもう一方では、徹底的にコマースリズムに利用されていくということがあります。けれども、そういういわば汚染された環境の中でも、なおかつわれわれはオリンピックを観たり、半分は熱中したりします。なぜなのか。要するに、そこに感動があるからです。だからこそ、スポーツは人を魅了して、そして結集させたりする、そういうスペクタクルになるのです。

あるいは、スポーツがそういうスペクタクルでありうるのはなぜか、ということを考えてみたいと思います。これはアスリートにとつても、観る人にとつてもそうですが、賞金を得るとか、社会的な榮譽を得るとか、あるいは、一般の人なら健康になるとか、そういう実利的な関心というものももちろんあるでしょう。人をスポーツに向かわせる動機というものは、現実にさまざまでありうるでしょう。けれども、そうした動機が、人にスポーツをやらせたり、あるいは熱中させたりして、よくいう「感動」を生み出すわけではないでしょう。もちろん、そうした動機は羨望を誘うことはあるかもしれませんが。契約金何億とか。けれども、それは感動は誘わない。

では、感動というのはどこからくるのか。ことばで表現するのはなかなかむづかしいんですが、せんじ詰めて行つてしまえば、そこに真剣なゲームが繰り広げられているからでしょう。勝負にかけて、記録にかけて、そこに、なぜあんなに真剣になるのか、ということがわからないほどの、なぜ、なんのために、ということがわからないような、そういう無償性が、無償の真剣さがそこにある。あんなに必死になつてなんになるのか。なんだろう、あの真剣さは。ある意味では、馬鹿みたい、ですまされるようなことを大真面目に競い合っている、あるいはひとりで演じている。そんな理解を越えたほどの真剣さがそこにあると、その行為は、われわれの通常の理解を超えてしまうわけですね。ですから、そういうものは、超人的なパフォーマンスと言わざるをえない。ふつう、われわれが人間と考えているような姿を越えていくようなものがそこにあるわけです。

実際、やつているアスリートの側も、それから、それを手に汗握つて観ている人も、文字どおりわれを忘れています。つまり、わたしというものをなくして、演じられるその場にのめり入りこんでいる、そんな状態なんです。まさしく、それがエクスタシスです。そこに込められているのは、これをやっていくらの報酬が得られるとか、これをやつて有名になつてどうの、といった世俗的な配慮とは違うものでしょう。むしろ、そんな世俗的な配慮を吹っ飛ばして何かが起こっているということですね。

さきほど言つたように、一人ひとりがバラバラな個人になつて、労働力として自分を売つて、余暇で自由な時間を得るといふような生活をしているとき、その自由といふのはある意味では牢獄でしょう。その牢獄から解

放してくれる瞬間があるわけです。インデヴィジュアルで自由な生活といふものは、繋がりがや支えを失つて、たいへん苦しい生活でもあるわけですね。そういう「自由」から、われわれをもう一度解放する。

それを少し言い換えてみましょう。われわれはふつうの日常生活の中では、からだをなにかのために使っています。ところが、スポーツというのはなにかのためにからだを動かすものではなくて、からだを動かすこと、そのものが追求されるわけです。だから、スポーツの中で表明されるというか、そこで表明され肯定されるのは、人がからだで生きているという事実そのものではないでしょうか。日本語の場合には、わたしはからだを持っているという言い方はまずしません。ヨーロッパ系の言語でも、それが強い意味を持つかどうかはわかりませんが、バスク語では、からだに關してどういふ動詞を使うのでしょうか。少なくとも日本語では、からだは所有の対象ではなくて、生きているということ、からだで生きているということです。おそらく、スポーツということばで括られる活動の一番の特徴というのは、からだを他のことに使うのではなくて、からだ自体の力のようなものをそのままに表明させることだと思います。すると、そのからだの表明が、もちろん、意識がからだを唆して突き動かすわけですが、そのからだの表明が逆に、閉じられた意識の解放をもたらす、それがスポーツの醍醐味なのではないかと思ひます。

贈与空間としてのスペクタクル

この国際セミナーのテーマになつてきた近代競技スポーツと伝統スポーツということですが、その両方のタイプのスポーツにも、いま言つたようなことが流れていると思います。どちらにも基本的にはあるのだ。いわゆる近代スポーツの方は、さきほども言ひましたように、そのもとになつた形態を生み出したさまざまな条件のようなものをすべて削ぎ落して、中性化する、ニュートラルにしてしまふ、そういう方向に進んで、グローバルなルートに乗つていくわけです。そこで、スタンダードな形ができあがつてゆきます。要するに、できるだけ共通になるために、じやまな部分は切り捨てて、カウントされる要素を少なくし、さらにそれが数値化できるように、平準化してゆきます。そして、結局、経済とそりが合うようになつるわけです。そして、最終的な価値は数値出来高のようなものだけになつ

ていきます。

それに対して伝統スポーツと呼ばれるものは、ぜんぜんニュートラルではないんですね。柔道の例でわかるように、できるだけニュートラルにしないとグローバル化することができません。グローバル・スポーツになるということは、どこにでも持つてゆけて、同じルールで、どこでも同じようにやれる、というようにしないといけないので、そのスポーツが生まれた状況、歴史的あるいは文化的な背景とか生活の仕方とかを、切り離していかなくてはなりません。逆にいうと、伝統スポーツと呼ばれるものは、いま言ったようなローカルな生存環境と結びついたある種の儀礼性をもっています。ですから、相撲の場合を考えてみてもそうですが、それをグローバル化するかどうかというのは、いわば政策判断の問題になります。昨日の瀧元さんの発表のときにも、近代スポーツと伝統スポーツとは共存しうるのかという質問があったと思います。スポーツというものが、もともとスペクタクルという性格をもっているということを考えると、いまの問いに対しての具体的な参考になるような例があります。

スペクタクルと言いましたが、付け加えておきますと、スポーツというのは本質的に見せ物としての性格をもっています。つまり、観る（観戦する）人がいるわけです。あるいは、人に見せるという側面があります。これだけのことをして見せるとか、これだけのことができる、とか。それを、あんなことをしている、と言いながら観る。それにともかく、感動というのは一人では生まれないのです。もちろん、山に籠もって、ひたすら孤独に修行し、なにかすごい技を編み出すといったこともあるでしょう。

それでも、これは『ツアラトウストラはかく語りき』の冒頭ですが、「ツアラトウストラ、齢三〇歳になりしとき……、といつて山から降りてくる場面があります。ツアラトウストラは孤独な瞑想の果てにいわば悟りを開いたわけです。けれども、その悟りは自分ひとりだけならなんの意味もない。この悟りは人のためにある。だから、それを与える対象が必要なのです。そこで、ツアラトウストラは太陽に呼びかけます。太陽よ、お前にもし照らすべきものがなかったら、お前がそんなに明るく光輝いても、それがなんの役に立つだろう、空しいことではないか、と。だから、自分もこの悟った智慧を人びとに分かち与えるべく地上に降りていく、と言うわけです。太陽の光のように、この智慧はみんなのものだ、ということですから、

ね。

力とか富とか、そういうものは与えるためのものである。それと同じで、拔群のパフォーマンスも観てくれる人がいるから成り立つ。卑近な例で恐縮ですが、わたしたちも昨日（八日）太極拳の実演をやらせていただきました。みなさんに観ていただいたお蔭で、わたしも稲垣さんもふだんよりはひとときよくできたのではないか、と思います。そういうことがあります。

つまりスペクタクルというのは、基本的にはそこで演じる人は自分のすべてを観客に与えるものなのです。それは贈与だということです。そして、それを受け止める観客は、逆に演じている人たちを支えているという関係があります。スポーツというのは、そういう関係のなかで初めて生きるものではないでしょうか。古代のオリンピックでもそうで、あれは共同体の儀礼と切り離せないものですが、みんなが参加している、みんなが観ている前で競技するわけです。

近代スポーツと伝統スポーツ

また、スペクタクルということを考えますと、最初の日本近代の歴史というところに立ち戻ってみると、日本が西洋の文物を受け入れたときに、日本の演劇、スペクタクルも大きく変化しました。それまで日本には能とか、歌舞伎とか、浄瑠璃とかがありました。けれども、ヨーロッパからまったく違う演劇が入ってきました。そのとき、日本人はヨーロッパの芝居を真似して、それを「新劇」として導入しました。その後、二つの流れは共存して、第二次大戦後にはもつとモダンな、コンテンポラリーと言っているような、世界のどことも共時的である、そういう演劇ジャンルが生まれます。ですから、現在の日本には、大きく分けて三つの演劇のジャンルがあります。その導入の過程では、一方の影響を受けてもう一方が衰退するとか、ときには混じり合うとか、そういうことはありました。けれども、現在みてみると、歌舞伎が、骨董のような古典芸能になってしまったか、という点必ずしもそうではありません。歌舞伎は歌舞伎で世代替わりを繰り返しながら、新しい役者の登場とともに更新されてゆきます。むかしの歌舞伎も、一年たりとも、同じ歌舞伎ではなかったはずで、リボリユーションはあったわけです。では、新劇の系統はというと、これもずっと続いて

います。しかも、コンテンポラリーな演劇もそれなりに生み出されている。それぞれが影響し合いながら、それぞれの活力を維持しているわけです。これは、まさにそれがスペクタクルの例ですが、いわゆる近代の競技スポーツ、あるいはグローバル化していくスポーツ、それと伝統スポーツは、伝統スポーツがそれを更新する人によって活力を失わないかぎり息を吹き返して続いていくだろうし、あるいは新しいものをつくるかも知れません。それに対して、グローバル化したスポーツというのは、一見世界に普及したように見えながら、だからこそ商業主義の食い物になって倒錯してゆくというか、いろいろ複雑な問題を抱えています。

いま、どういうところにスポーツの未来があるかと言ったら、やはり中性化することなしに、それぞれ固有の条件を抱えて人びとの生活意識と結びついて、そこに活力を汲んでいるようなものが、生活条件の変化と折り合いをつけながら更新されてゆく、そんなスポーツのかたちに未来があるのではないか、と思っています。

ということで一時間半、まずは通訳の労をとられた竹谷さんを拷問にかけて、地獄に送ってしまったようですが（爆笑）、みなさんにもつらい思いをさせてしまいました（笑い）。長い時間、お付き合いたいへんありがとうございました。あとは、パラダイスをお楽しみください。